

第3回キャンパスおだわら運営委員会 会議記録

日 時	平成25年10月10日(木) 午後2時から4時まで		
場 所	小田原市生涯学習センターけやき 4階 第2会議室		
委員長	三輪 建二	欠席	学識経験者
副委員長	瀬戸 充	出席	生涯学習の向上に資する活動を行うもの
委員	金澤 久美子	出席	学識経験者
	齊藤 ゆか	欠席	
	左京 泰明	出席	
	有賀 かおる	出席	生涯学習の向上に資する活動を行うもの
	安藤 恵	欠席	
	岩屋 泰彦	欠席	
	与那嶺 信重	出席	
	石井 悦子	出席	公募市民
	永田 圭志	出席	
	宮地 妃佐子	出席	教育委員会が必要と認める者
教育委員会	栢沼教育長		
文化部	諸星部長、原田副部長		
事務局(生涯学習課)	古矢課長、大木担当副課長、村田係長、相澤主任、茂木主任		
キャンパスおだわら事務局	奥村理事長、和田副理事長		
キャンパスおだわら人材バンク実行委員会	早野委員長		
傍聴者	0人		

※委員は区分別五十音順(委員長・副委員長除く)

1. 栢沼教育長挨拶

- ・教育長の交代に伴う新任挨拶を行った。
- ・三輪委員長欠席のため瀬戸副委員長が議長を務めた。

2. 議題

(1) 開設講座について

キャンパスおだわら事務局（以下C事務局） 資料1は、前回の2回目以降の10月からの開設講座である。全項目で135講座あるが、先に一部修正がある。2ページ目75番の講座は、確認の結果、入会募集のための講座であることが判明したので、削除願いたい。したがって134講座ということである。簡単に大きな視点だけを説明すると、今回非常に講座が増えている。人材バンクの後期講座が11月から1月2月まで開催される予定で、これが40講座ほど増えており、前回の講座よりかなり増えているのが大きな特徴である。2点目に右がジャンルの区分になっているが、音楽・演劇が8講座でおよそ6%、文学歴史が24講座でおよそ19%、美術工芸が15講座で11%など、大きな分類ではこのような傾向が見られる。

相澤主任 補足をさせていただく。認定にあたってのお願いであるが、前回もご説明したとおり、キャンパスおだわら事務局での仮認定の際には、広く市民に開かれた講座であることや、営利を主たる目的としないこと、特定の政党又は宗教を対象としたものではない等の認定基準に照らし合わせ、明らかに基準を満たしていない講座については不受理とし、それ以外は原則受理としている。そのような視点から、もう一度委員の皆様に見ていただければと思う。

副委員長 なにか質問はあるか。

有賀委員 講師名の記載がされていないところ、それは主に行政が主催しているということで、よろしいか。もう少しわかる範囲で記入があればと思うが。

C事務局 主催者から情報をいただく時点で、講師についての記載があれば載せ、特に記載がない場合にはそのまま空欄としている。

副委員長 それでは認定ということでもよろしいか。

(異議なし)

(2) キャンパスおだわらのあり方について

古矢課長 議題の(2) キャンパスおだわらのあり方について、お手元の資料に基づきご説明する。前回の運営委員会では、キャンパスおだわらの概要についてご説明させていただいたが、今回の運営委員会からは、キャンパスおだわらのあり方について議論していただくこととなるので、まずは、今後の議論の進め方について、事務局の考え方をご説明させていただく。

参考資料の「検討スケジュール」をご覧ください。

今回の第3回運営委員会では、本市の総合計画「おだわらTRYプラン」と現行のキャンパスおだわらとの関連についてまずご理解いただき、その上で改めて今後のキャンパスおだわらが目指すべき具体的な姿を描くための議論をお願いする。

そして、次回12月中旬に予定している第4回運営委員会では、この目指すべき姿をふまえ、現行のキャンパスおだわらの仕組みを検証し、第5回運営委員会からは、キャンパスおだわらの方向性の検討に入っていただきたいと考えている。ただ皆様の議論の状況によっては、このスケジュール通りではなく、少し柔軟に考えていきたいと思っているので、その際またご相談させていただく。

続いて、今回の運営委員会で議論するにあたっての説明をさせていただく。資料2をご覧ください。

左半分は、前回の運営委員会でもご指摘をいただいているが、本市総合計画とキャンパスおだわらとの関係についてまとめたものである。参考資料として、本市の総合計画「おだわらTRYプラン」の概要と、その総合計画を策定するにあたり、当時の職員が将来の小田原像を思い描いて作成したシナリオを添付した。なお、このシナリオについては、あくまでも総合計画を策定した時に作られたものであるため、その後シルバー大学事業が終了したり、現在のキャンパスおだわらが行なっていることと少し一致しない部分もあることをご了承願う。

総合計画「おだわらTRYプラン」の概要をご覧ください。総合計画では、将来都市像「市民の力で未来を拓く希望のまち」を実現するため、3つの命題を置いた。「新しい公共をつくる」、「豊かな地域資源を生かす」、「未来に向かって持続可能である」この3つである。さらに、その都市像「市民の力で未来を拓く希望のまち」を実現するためのまちづくりの目標として、「いのちを大切にする小田原」、「希望と活力あふれる小田原」、「豊かな生活基盤のある小田原」、「市民が主役の小田原」という4つを定めた。そのうちの「希望と活力あふれる小田原」という目標の政策分野に「歴史・文化」があり、その施策として、「生涯学習の振興」が位置づけられている。

概要の2ページ目をご覧ください。

生涯学習の振興が目指す姿として、「郷土に誇りを持つ心豊かで多彩な人材がさまざまな場で活躍している」を掲げ、この姿を実現するため、さらに3つの詳細施策を定めている。1つ目は、多様な学習の機会と情報の提供である。ここでは、市民、行政、教育機関などとの連携により社会的な課題や市民ニーズに対応した多様な学習の場や、機会、情報を提供するとともに、市民の主体的な生涯学習の運営を促すことを定めている。2つ目は、郷土についての学びの推進である。ここでは、二宮尊徳をはじめとする先人など、恵まれた地域資源を活用し、郷土について知り、学ぶ機会を提供し、小田原ならではの学習を進めることを定めている。3つ目は、学んだ成果を生かす環境づくりである。ここでは、学習活動の成果を発表する場や、学習の記録を認定する仕組みをつくるなど、より質の高い継続した学習につなげるための環境をつくり、まちづくりに意欲をもって取り組む人材を育成することを定めている。

資料2にお戻りいただきたい。

このような詳細施策を実現するために、理念や具体的な仕組みを整えたものが、キャンパスおだわらである。また、このキャンパスおだわら事業の前提にはさらに大きな概念である小田原市全体の社会教育・生涯学習のあり方というものがあり、これについては、別途、社会教育委員会議という教育委員会の附属機関へ諮問をしているところである。以上が、総合計画とキャンパスおだわらとの関係である。

資料2の右半分をご覧いただきたい。ただいま説明した詳細施策は、文章で述べているため、具体的なイメージ、数字的なイメージも描きにくいものではあるが、今後のキャンパスおだわらの仕組みの検証や、方向性の検討をするためには、ここで改めて具体的な目指すべき姿を描き直すことが不可欠と考える。左側の「施策に基づくより具体的なキャンパスおだわらが目指すべき姿(案)」とある欄には、キャンパスおだわらの具体的なイメージについて、詳細施策に照らし合わせ、行政がイメージしたものを掲載させていただいている。

本日、委員の皆様には、右側の空欄にあるように、「左案（行政がイメージしたもの）で描ききれていない部分とその具体的な目指すべき姿」について議論をお願いしたいと考えている。前回の運営委員会でご提示したこれまでのキャンパスおだわらの行政としての総括、「それぞれの分野別には、キャンパスおだわらになることでより対象や活動が広がり、良くなったと評価できることが多々ある。その反面、広がった対象・活動・効果などを効率的・一元的に把握することが追いついておらず、今後の大きな課題と考える。コスト面での改善も必要」という評価を下す際の視点にも表れているが、これまで

のキャンパスおだわらの推進にあたっては、生涯学習事業をいかに全面的に展開するか、また、キャンパスおだわらの仕組みをいかにうまく回すかなど、生涯学習という枠にとられ過ぎたきらいがあり、総合計画上、詳細施策の上位にある「郷土に誇りを持つ心豊かで多彩な人材がさまざまな場で活躍している」という姿や、まちづくりの目標に対して、生涯学習を通じて行政が何をすべきかという視点が欠けていたように感じている。委員の皆様には是非、こうした視点を含めて、行政がイメージしたもので描ききれていない部分を補足していただきたい。例えば皆様が映画の監督であったら、詳細施策及び生涯学習の目指す姿にある文章をもとに、どのようなイメージ映像を撮っていくかということである。今後、行政がイメージしたキャンパスおだわらの目指すべき姿に何か追加するとしたら、どういうシーンを追加するかという観点からイメージを思い描いていただければと思う。

副委員長 ただいま事務局から行政がイメージしたもので描き切れなかった部分を補足というような旨の話があった。どこから議論に入っていくかという、何かご意見はあるか。

古矢課長 新しい小田原へ3つの命題ということがこの総合計画で触れられているが、この3つの命題「新しい公共をつくる」、「豊かな地域資源を生かす」、「未来に向かって持続可能である」という視点に立った場合、キャンパスおだわらがどうやっていくか、また、希望と活力あふれる小田原というまちづくりも目標に掲げているけれども、そうしたところを目指す姿、これは総合計画上で郷土に誇りを持つ心豊かで多彩な人材となっているが、生涯学習の進行という視点からこの進め方、やり方、キャンパスおだわらが妥当か、そうしたところをまずご意見いただければと思う。

補足すると、新しい講座であるが、キャンパスおだわらは新しい公共という視点をさらに強くし、こちらにいるNPOの皆さんにその部分を担っていただいている。キャンパスおだわら始めるにあたっては、新しい公共というものは何なのかということ、また、それを生涯学習でやるというのはどういうことなのかということなども議論が足りなかったと思っている。

副委員長 ご意見あればお願いします。

石井委員 私は自分がけやきのいろいろな講座に参加しているのだが、その中で市がこういう考え方をしているということは知らなかった。生涯学習というのが何かをただ勉強するだけでなく、人材を育てると言われた時に、私はそんなつもりで参加してなかったという気持ちがあった。参加する側としては、何かを勉強、勉強と言われると続かないし、楽しくないと思う。なぜ自分が10

年も、ほかの人たちも20年も活動を続けているかという、勉強というよりは自分が楽しくて、また友達もでき、その中でいい人間関係ができているから続いているのではないかと思う。資料を読んだ時に、学習とか学ぶという文字がすごく多いので、それを前面に出すのは、良くないのではないかと思う。

諸星部長 受講者の方の視点ということで貴重なご意見をいただいた。今回はかなり生涯学習のありようを、まちづくりの目的に沿った形でという意味合いでご説明させていただいている。総合計画との関係性の中で、行政がどういう目的で生涯学習を推進していくかというところで、まちづくりの目的にかなうようにという趣旨で組み立てて本日は説明をした。

一方で、生涯学習というものがどういうものという議論の中では、確かに自分自身が楽しみ、仲間を見つけるためによいのではないかという議論もあっていいと思うし、現実にもそういう議論もある。生涯学習に対する考え方として石井委員がおっしゃっていることも生涯学習の一つの捉え方であるということ間違いはない。我々はそういうことを認識しつつも、一方で行政が税金を投じて実施していく事業としての正当性、合理性を考えつつ、生涯学習のあり方、その中で行政がどういう役割を果たすべきかを整理しようとする、やはりまちづくりにかなり重点を置いてやっていくべきなのではないかというところに集約されていくと考える。もちろん楽しみながら続けていただく講座、生きがいに通じる講座、仲間づくりに通じる講座が生涯学習の講座の王道の一つだと思う。そのような講座をなくしてしまうということを申し上げるのではなくて、そのような講座は市民の方や、NPO、キャンパス講師や人材バンクなどが担っていく事業として、棲み分けていくのではないかと思う。そのような講座が今後もうまく続いていくためには、どういう運営の仕方をしていくことがよいのか、ということがNPOの方々の運営体制の中では話題になっていくと思う。そういった意味で石井委員のご意見は大変貴重であり、それを踏まえつつも、今日的な生涯学習のやり方として行政が役割を果たすのであればこういう組み立てになるのではないかなという整理をさせていただいた。

左京委員 先ほど議事の最初の方で、今年度の下期の講座について意見を求められたところがあった。生涯学習の目的として個人の楽しみや仲間づくりという目的と、地域のまちづくりに寄与するという目的が出てきたが、この下期連続講座というのはその2つの目的からみた場合、特に地域のまちづくりに寄与することを目的として行政が設置している講座というものはあるのか。

古矢課長 キャンパスおだわら自体が、講座を企画する方たちがそれぞれの企画意図を

持ってやっているのです、たとえばお年寄りが中にこもらないように外に出よう、楽しく仲間づくりをしてもらおうという講座もあれば、具体的にまちの課題に向かっていくような講座というのもあると思うが、特に行政が企画する講座、例えば78番の人権を考える講演会や、88番の男女共同参画社会を作っていく講座など、行政が主体でやる講座というのは楽しみというよりも、ある種まちづくりという意識を持ったものが多くなっていると思う。初歩的なことであるが、キャンパスおだわらの目指すべき姿の中で、みんなが生涯学習によってつながっていく、人と人とのコミュニケーションのあり方、それによって人が元気になっているという、一番大元の姿というのをここでちゃんと書き切れてなかったということを改めて思う。どうしても行政は説明責任を果たさなければならないということもあるので、すぐ成果というものを見てしまうのだが、現実には石井委員のように楽しみで始めた講座がきっかけとなって、生涯学習センターフェスティバルの実行委員会という形で関わっていただくようになり、さらにこのような場に出てきていただくように、行政からとても必要とされる人材になるという経緯もある。

大木副課長 左京委員の質問については、一覧表の右から2番目の主催のところをご覧ください。例えば上から2番目、「行政(かもめ図書館)」というように書いてあるところがある。この「行政(〇〇)」と書いてあるところと、それ以外で大きく分けて性格が違う。行政と書いてあるところは多かれ少なかれまちづくりの関係で企画されている講座、それ以外のところはどちらかと言えば趣味の講座と言える。さらに行政の中でも21番、32番この2つについては、我々生涯学習課が企画している講座であり、これらの講座はまちづくりに寄与するということをさらに明確な目標にしている。資料にもあるように、郷土に誇りを持ち心豊かで多彩な人材が様々な場で活躍しているという目的に照らし合わせ、歴史や文学などを中心に企画している。さらに、まちづくりのサポーターを養成する講座、防災講座、子育て講座を年間で3つほど企画している。

与那嶺委員 生涯学習の結果としてまちづくりがあると思う。生涯学習というのはやはり、自分の意思で、自分の責任で、あるいは自分の生活が充実するように、自分で選択し、一生続けて学習していくものであると考える。実は私は何年前にあった成人学校で、7回の刻字の講座を受けた。これでは足りないのです、今度はグループを作って自分達でやる。それを広げていくのが生涯学習であり、キャンパスおだわらの目指すものではないかと思う。まちづくりにすぐ直結するものではないのではないかと。しかし、学んだことをそのまま自分のものにしてただ学びっぱなし、教わりっぱなしではなく、では誰かに教えて

あげようという場合もあると思う。例えば、先生がいて、生徒からグループができて、さらにそのグループの中からだれかが先生役になって新たなグループができたりということがある。これがキャンパスおだわらの目指すものではないかなと思う。

金澤委員 講座を企画した背景にはこういう狙いとこういう狙いとこういう狙いがあり、それにこの講座が対応しており、ここは行政がやり、ここは市民団体がやりというように、講座全体がわかる見取り図のようなものがあると、講座を終了して見たときに結果としてその部分の狙いは違っていたのではないかという検証や、次の講座の開き方を考える際に利用できるなど、もう少しわかりやすくなると思うがいかがか。

副委員長 この資料はキャンパスおだわらが主催した講座なのか、それともこういう講座があるという情報提供なのか。

古矢課長 主催者が生涯学習センターけやき、人材バンク実行委員会、NPO法人小田原市生涯学習推進員の会であるものについては、こちらで企画をしているものである。それ以外のものについては、情報提供ということである。金澤委員がおっしゃった全体の把握ということであるが、まず把握して、民間に任せるのか、足りないところを行政が行うのかなど、これをどうやっていくのが現在まだできていないところである。

左京委員 資料2の、施策に基づくより具体的なキャンパスおだわらが目指すべき姿であるが、資料1でこういった講座が予定されているが、これらの講座が今後も継続していけば、このキャンパスおだわらが目指す姿が実現されると考えているか。

古矢課長 例えば人材バンクという制度がこの4月にスタートし、講座をやっていく中で、生涯学習に関わる人が増え、教える、学び合うという関係ができてきたと思っている。しかし、これらの一つ一つの講座の集合体ですぐに目指す姿を実現できるかどうか。それを具体的な成果にするためにはキャンパスおだわらの中でも、もう一つ何か仕組みを作っていくなり、何か評価の基準を設けるようにしなければならないと思っている。

左京委員 講座の部分であるが、キャンパスおだわらの中にも何らかの仕組みを作ったり評価の基準を設けたりというのは、この目指すべき姿に至るまでのプロセスの中に仕組みと評価を作るべきという話か。それとも目指すべき姿そのものに、例えば達成目標を設けるべきだという考えか。

古矢課長 目指すべき姿がたとえば数字でいったらどういうことでわかるのかとか、こ

れが実現しているかどうかというのは、どうやったら計れるのかということもあるし、ただ講座をずっと続けていく、講座の情報を提供していくというだけで、本当に目指す姿に近づけるのか、何かもう一つアクションやその効果を高める手段が必要ではないかということもある。

左京委員 その点は今後検討していくということか。

古矢課長 ぜひ皆様方のご意見をいただきながら、評価システムを作るのがいいのか、それともキャンパスの中では、例えば本人の学習記録のことなども謳っておきながらまだ実現していないところがあるので、それを実現することによって目指す姿に近づけるのかなど、切り口がいくつかあると思う。

宮地委員 命題の中で持続可能なところがある。そこを詰めていくと、キャンパスおだわらとしてのコアの部分は固定して続けるという形でいいのではないか。前期にやっていたあれがやりたいというように市民の方が思って、来年もやるのかということになると、ある程度の小田原ならではのものは、生涯学習課の方で持続していただくしかないと思う。詳細施策の3番のところにある、講師の育成、そういうことも行政に置くことによって、将来・未来に向けての持続可能なものができていくように感じる。

古矢課長 例えばもう10年以上にわたって、小田原市で継続してやっている報徳塾という講座がある。ただそれが継続してやっていることの成果を発信しきれない、下手なことをやるとマンネリととられてしま^うのだが、小田原市としてはちゃんと考えがあってそれを計画してきたものなので、核になるものについては、ちゃんと時間をかけて継続して見ていく視点が必要だと、宮地委員のお話から感じた。

有賀委員 小田原ならではの学習ということで、報徳塾の例を出されたが、おだわらっこ教育プランのスタートを踏まえて新たに制定された学校教育振興基本計画の基本方針の中に、小田原ならではの教育スタイルの確立があり、小学校では4年生の総合的な学習の中に尊徳学習が位置づけられている。子どもたちの中に尊徳はすばらしい人だという意識づけができていたので、キャンパスおだわらの行政講座の中に報徳塾も開設されているが、もう少し体験を重視した子ども向けや親子向けの講座があれば、楽しく参加できるのかなと思う。子ども向けの講座は少ないので、親子で楽しめるような講座も増やしていただければと思う。

永田委員 今行われている講座にしても、開催される予定の講座にしても、講座自体のベクトルが2つあると思う。皆で楽しみながら、仲間と新しい関係を作って

いくという講座と、報徳塾のように行政の方で企画する、今後の小田原を担う人材の育成といった講座と、両方が1つの大きな入れ物には入っているが、ものが違う。これを分けるということは考えているのか。

古矢課長 一つの講座でもいろいろな側面を持っており、特に分けるということは今まで考えてなかったけれども、情報を提供する手段、提供の仕方などは分けて考えることもできそうだと思う。以前、小田原市で生徒手帳というものを作り、そこで講座を受けるとシールがもらえるという事業を行っていたが、その時はまちづくり課程という言葉を出し、趣味の講座で例えばフラダンスを習ったときにはまちづくり課程にはならないけれども、環境問題について学んだらまちづくり課程。自由科目と必修科目のような感じで分けて、そこで必修科目の方を特に何単位以上取ったらまちづくり課程を修了したというようなシステムで、過去にそういう講座の認定制度を設けていた。

永田委員 カテゴリーが増えすぎるとより複雑になってわからなくなってしまうと思うけれど、実際そういうふうに分けて提出するどうかは別としても、分けて考えることをお願いしたい。

大木副課長 第1回運営委員会でお配りした資料3をもう一度お配りしたので、キャンパスおだわらの講座の体制をもう一度確認させていただいた上で、議論を進めていただければと思う。

資料3の内容が、キャンパスおだわらが学習講座として行おうとしているものである。区分としては、市民講座、企業講座、教育機関講座、行政講座の4つがある。これらの区分をそれぞれ充実させていくことがキャンパスおだわらのビジョンとして23年度のスタートの段階では確認されている。この出だしがいいのかどうかというのはまたご意見いただければと思うが、ではこの形に今なっているのかどうかというのも評価の対象となってくると思う。資料1の主催のところを見ていただければわかるように、人材バンクというのはこの講座体系でいうとキャンパス講師講座にあたる。民間の方々に主催していただく講座は市民企画講座というところにあたる。主催に行政とあるところは行政講座にあたる。神奈川県主催の講座や、県立西湘地区体育センターがやっていたらいるもの、これも含めて行政講座であるが、資料1の講座に入っている。資料3の中の企業講座、教育機関講座については、今回見ていただく中には無く、ここまでの中でもやはりこの辺の講座はキャンパスの講座に認定していないので、非常に薄いところであると思う。

左京委員 先ほどからキャンパスおだわらとしての目的という話がある。企業、教育機関、行政の他の部局のものもあると思うが、それらの主催者の方々に対して

はキャンパスおだわらとしての目的を伝えて、それに沿うようにもっと講座を開設してほしいということを伝えた上で企画してもらっているのか。それとも単純に彼らが企画しているものをキャンパスおだわらとして情報提供のみを行っているのか。

大木副課長 資料3の講座体系の市民講座、そのうちの市民企画講座の備考欄に、公募型市民企画講座というものがある。そちらについては、例えばジャンルで不足している部分などを、今事務局をお願いしているNPO法人生涯学習推進員の会で公募という形で募り、そちらを充実していただくという取り組みをしている。それ以外はそういったことを積極的に伝えていくということではなく、情報をいただいた講座を認定していくものである。

C事務局 今時点の状況はあくまでも市民の皆様こういう講座がありますと提供することが中心である。ジャンル別に整理して講座情報を提供するというのもキャンパスおだわらの特徴で、整理し分類しながら足りないところを積極的に公募型として補充している段階である。行政としての明確な目的をもってというのは、完全にはすり合わせておらず、最大限いろいろな講座情報をまずは提供して、受け取り側である市民の判断のもとに関わっていただくという話で、まちづくりや人づくりへといった格好を進めている。

金澤委員 評価ということが先ほど出たが、評価というのは行政側がというだけではなく、受講した人たちの評価が次の講座につながっていくかということにかかると思う。まちづくりといったように、どんなに行政側が理想的なものを描いて講座を行ったとしても、参加者にとって魅力的に映らなかったら、受講者は集まらないので、やはり楽しく参加できるとか敷居が低いというところが一番の人を呼び込むポイントになると思う。

参加してまず楽しかったとか充実感を得られたかどうかということの評価してもらい、その時に、ただ楽しかったで終わるのではなく、楽しさの内訳というところで、仲間づくりができたとか、小田原市に対して少し関心を持てたとか、地域でもこんなことをやってみたいと思ったとか、講座を受けて感じたことの質的な面を分析して行って、それが行政側の目的と確かに合致しているとか、あるいは行政側がこういうことを求めて期待してやったのだけれども出てきたのがまた別のものだったので、もしかしたら市民のニーズというのは別のところにあるかもしれないなど、チェックすることもできると思うので、一つ一つの講座が終わる度にその評価を受講者の方から丁寧に聞き取りながら形に残していくことが評価に入っていくのではないかと思う。

左京委員 前回から常々思うのは、インプット、アウトプットの後に、アウトカムに関

する情報がないということである。こういった事業を行ってこういった定員でやってみた、それは一体どのくらいの応募があつて、こういった反応がそこで得られたのか、満足度であったり、得られた具体的な内容をいくつか分類してもいいのではないか。それがそもそもの目的と合致しているのかどうかというところの自己のPDCAのCである。P、Dまではわかるけれど、Cの部分がもう少し、もしとっているならデータとしていただけると参考になる。たとえば上期のそれぞれの講座の募集、応募人数の状況であるとか、参加された方の感想、参加していらっしゃる方の属性もあつたらいいかもしれない。その辺が明らかになってくれば、例えばこういったテーマでは人が集まっていないとか、あるいはこういったテーマだと定員に対して人が集まりすぎている状況なので、もっと講座を増やした方がいいのではないかとこの検討も可能になってくるのではないかと。

先ほどいただいた資料の、生涯学習の振興というこのプリントの中で関係するなど思ったのは、左下の生涯学習講座の実施状況、このグラフである。平成17年以降の講座数の推移と受講者数の推移があるが、講座数は年々微増というか増加しているとあるが、受講者数に関してはそんなに増えていない、あるいは19年から21年の変化をみると講座数が増えているけれど受講者数は減少しているということが言える。こういったことは何か行政側、運営側の議論としてあがってたりはするのか。つまりこういった数字をどのように分析しているのか。

古矢課長 こちらのデータはキャンパスおだわら以前のものであるので、講座数を増やしてきたというのは、特に、きらめき☆おだわら塾などの運営母体の皆さんにがんばっていただいたからだと思っている。本当はシルバー大学の定員の関係や、それぞれの定員に対する充足率というデータがあれば、募集をこれだけやったけれど人がきていないというのがわかると思うが、これだけだと、そういう分析ができず、またキャンパス以前のことでもあるので正確なお答えが今はできない。

C事務局 いま具体的な数字のお話が出ているが、平成17年18年19年度は小田原市が進めていた成人学校で年間60講座くらいあつた。この成人学校については約10年近くやっていたが、成人学校終了後生涯学習センター講座に変わった。実情的にはここに関わっている人数が減ったということではなくて、統計上の数字としてはこういうものがありますよと。それから当然私ども講座を実施した後は、講座の反省会・総括を必ずやる仕掛けはある。受講者の満足度というのが、約80～90%満足という回答が大半で、そういう状況を踏まえていろいろと講座を展開している。

- 左京委員 満足度についてはわかったが、定員に対する応募状況というのは低下しているのか。
- C事務局 当然ある。それが増加の傾向云々ではなくて、講座ごとにそういう数字がでてくる場合もある。
- 左京委員 定員に対する応募状況については、具体的な数字が今もしわかれば教えていただきたい。たくさん集まっているのか、ほとんど集まっていないのか、まったくわからないので。
- C事務局 年間1, 350講座あるが、だいたい平均して6～7割、さらにはこれを超えるものもあるので、やはり単純に平均すると7割くらいである。
- 左京委員 人が集まりやすいものと集まりにくいものには何か傾向があるのか。
- C事務局 やはり地域性の関連もあるが、地域に関わるものについては参加率も高い。社会的な課題を解決しようとするような講座については、低い傾向がある。
- 古矢課長 行政について言うと、やはり文学歴史については、大体定員、特に歴史については定員を超えることがある。これはシルバー大学という前の制度からで、歴史学科は必ず抽選だった。その他の市民活動に直接結びつけてほしいと思ってやるような講座は、やはり集まりが悪く何度も告知をしたりという感じである。文学なども比較的人気がある。
- C事務局 今現在の小田原の特徴として、文学と歴史、これが非常に人気が高い。ただ非常に受講者の年齢層も高い。若年層というか若者、あるいは壮年層の講座自身も少ないけれども、残念ながら広がりがないというところが、我々実際にやっていて感じるところである。先ほど金澤委員もおっしゃっていたと思うが、どこにポイントを置くかという点が非常にこれから重要だと思う。それからもっと本当にまちじゅうキャンパスにしたいということであれば、子どもや中学生、高校生、あるいは若い人たち、そういう人たちが積極的に出られるような講座がポイントだと思う。
- 左京委員 今、残念ながらとおっしゃられたところで行政のみなさんもうんうんとうなずかれていたけれど、今参加されている方が割とご高齢の方が多くて、若者、壮年層の方が参加していない。これは今後参加していくような姿になって欲しいというのは行政側の方でも同じビジョンということか。
- 諸星部長 私は、別に残念ながらではないとも思っている。もちろん若い方々に参加していただきたいので、そういう講座においては、別の手だてを考えなければいけないというところはあるが、一方で今のお話は高齢者向けのある程度の

講座において小田原はかなりの充足をしているとも言えるので、その部分については喜ぶべきことではないかと思う。若年層の人たちをどう生涯学習のフィールドに呼び込んでいくかというところは別な工夫が一方では必要ではないかと思っている。そのための講座をもう一度確認して企画を立てる上でも、やはり先ほど金澤委員がおっしゃったような、俯瞰して分類して評価の視点を取り入れて全体を眺めて弱点を考えていくことが必要なのではないかと思う。

先ほどからも議論の中で、いわゆる趣味的なもの、そのジャンルを好きな方がご自身で選択してそこで一定の満足を得るというものと、まちづくりを目的とした講座を分類すべきかどうかという議論があるけれども、生涯学習の考え方の中ではそもそも分類できないものである。ただ我々の講座の狙いとか今後どういう企画を立てていくかということのために一定の分類が必要なのであって、これはこういう目的で、こちらはただ楽しんでいただければいいですよというような単純な分け方はそもそもできないであろうと思う。楽しみながらやっていたらうちに仲間ができて、その方々が社会貢献の活動につながっていくこともままあることだと思う。

一方で行政が主催する講座は、例えば生涯学習以外の防災とか環境が行う講座は、そもそもが行政目的を持っているものなので、そこには楽しんでいただきたいという前に、例えば環境の問題を考えてもらいたいとか、防災についてきちんと関心をもっていただいて、いざという時にこういうふうに行動していただきたいという目的が、そもそも持たれて講座が企画されているはずである。ただ、それだけでは人が集まりにくいので、何か他と結びつけるかという企画を立てたりしている部分があるので、そのところの難しさはあると思う。ダイレクトにそういう講座ももちろんある。いわゆる地域の何かお役に立っていただく、たとえば防災リーダーの養成講座など、そういう養成講座ももちろん存在するが、もう少し間接的に人材育成につながるものとして幅広い枠組みの中で企画が立てられていくということであるし、もう一つ言うと行政が主催すれば何かまちづくりの目的を持っているかということが必ずしも自明かという、そうではない。そういう説明があったけれども、厳密に言うと必ずしもそうではない。主催者によってそれがあるわけではなくて、市民の方が主催される講座においてもそのことが発展していくことによって何らかのまちづくりにつながるとか、環境運動につながっていくとかいろんな仕掛けを持った市民サイドの企画講座というのはもちろん存在するので、必ずしも行政が主催するものだけがまちづくりを目標にした講座であるということは言いにくいと思う。

逆に言うと行政が一定の行政目的を持ち、まちづくりにつながる狙いを持っ

て企画する講座の場合はそこに人が集まりにくい。一方では、人集めをするために逆に目的がぼやけてしまうような企画になっていくとか、そういう部分もあるのではないかと。まだこのキャンパスおだわらの状況把握というのが途中のままであるので、前回前々回からご指摘いただいているものにお答えしきれしていないものがあって、我々自身も全体を俯瞰して、一定の分類をして、ある視点を持って評価をして、どこに弱点があるのか、それが講座のカテゴリー上の濃い薄いだけではなくて、おそらくは企画内容的なものを含めて考え直さなければいけない部分を持っていると思うので、そのためにはどういう評価の視点をもって今後考えていくかというところもご議論していただきたい。今後の企画、行政が企画すべきもの、あるいはNPOの皆さんが企画するもの、あるいは市民のみなさんからこういうものを公募したいというところが出てくるかもしれない。

最近の傾向では、文化面に関してのワークショップ関係は、非常に斬新なものを増やしてきて、小田原ではこれまで一度も行われてきていなかったと思うが、コンテンポラリーのダンスのジャンルなどを取り入れてきた。これは一般的にみると生涯学習のテーマでも文化振興的なカテゴリーだと思うが、逆にキャンパスおだわらから見ればキャンパスおだわらの傘下にあることも考えられる。こういった新しい切り口のものは、確かに人がいっぺんにわっと集まるものではないけれども、参加された方々の手応えや反応は、非常に高いものがあって、それが繰り返し行われることによって、次の活動や、新しいネットワークなどにつながっていくということがあると思う。やりながら手ごたえを感じる場所であるので、本日ご説明した講座のようなものであっても、反応を見ながら次につなげていくというのは可能ではないかと思っている。

大木副課長 今、お配りした資料の中で、こちらは講座のうちの行政講座、その中の生涯学習課の我々の係で企画した講座の平成24年度実績である。全部で9講座、この中で上から2番目の歴史デビュー小田原城物語ダイジェスト版全3回、こちらについては上の小田原城物語全28回のダイジェスト版ということで、広く一般の方々を募集してやったものなので、こちらは少し他と性格が違うものである。それから下から3つ目の2月に開催の地域連携講座、こちらは自治会の皆様と連携したということで、対象は地域の方と限定しており、こちら性格がほかと違っている。それ以外のものについては、広く受講者を募集し、こちら右側に受講者数ということが載っているが、歴史デビュー40名、それ以外については定員30名。歴史デビューのダイジェスト版と地域連携講座の定員は割愛させてもらい、それ以外のものについては全部3

0名。歴史については定員を逆にオーバーしている状態。残りについては、半分から6割くらいである。2枚目は、この9講座に対してとったアンケートである。このアンケートは最初のページの活動実績の中で下3つを除いたもののアンケート結果という形である。満足度については満足、やや満足を合わせて70～80%となっている。

左京委員 このすべての講座が複数回だと思うが、一番上の歴史のものでいくと、全28回講座があったものに対して40名定員で、40人申し込みがあったということか。実際に全28回で各回、何人ずつ参加されたのか。

古矢課長 これは28回の連続講座の定員が40名で、申し込みについてはかなり多かったのを抽選で40名にしぼった。会場が複数会場なので、その都度は出席、欠席ということで2、3人風邪で欠席されたり、そういう方はいるが、ほとんどの方が7、8割出席できている。

左京委員 他の講座も平均して出席率は7、8割であると。

古矢課長 そうである。出席率は7、8割は確保できているかと思う。

左京委員 定員に対してもっと申し込みがあったけれど、40名で切っているということでしょうか。

古矢課長 その通りである。これについては確保している会場の都合の関係で、一つの部屋に入り切れるだけしか受けていない。

左京委員 ちなみに2つ目の小田原城物語全3回の方は、30名に対して62名、56名、63名。これは応募がその人数だったということか。

大木副課長 これは連続講座ではないので、広く定員を取っており、会場が100名くらいの会場でやっている。当日の申し込みも大丈夫なのでかなり多めに大きな会場でやっている。

左京委員 ただ資料としては、定員と申込者数と実際来た数でないと、分析、データとしては足りないと思う。

副委員長 私も見ている、1番目の40名は、28回毎回40名来たと初めは理解していたが、欠席もあったということで、受講者によっていろいろ解釈が違ってきってしまうと思う。

左京委員 例えば28回やってだんだん参加率が減って行って、最後に残った10人に対してアンケートを取ったらそれは満足度は高い。これだけだと全然読み取れない。

- 諸星部長 歴史の講座に関しては、それはまずない。最後まで参加される方は9割以上だと思う。
- 左京委員 個別のこの講座がどうだったのかということが言いたいのではなくて、全体に対してそういう視点が必要ではないかということが言いたい。今、個別の講座をチェックしているのではなくて、どういう見方をすれば正しく評価できるのかという手がかりを探ろうとしているということだと思っている。
- 古矢課長 左京委員がおっしゃるようにこちらで評価をしていただきたいという以前に、その評価のための正しいデータの作り方、たとえば仲間づくりにつながったとか、小田原に関心を持ったとか、そういうアンケートを取るにしても、どういうアンケートにするかなど、講座ごとに違う場合もあるし、コアな基礎データとしてこれだけはどれでも載せるとか、そういうところが非常にいろいろな課題を秘めているということを感じた。
- 左京委員 実際行われている講座の結果の計り方もそうだが、その目指す姿の結果の計り方も同時に見ないといけないと思う。それぞれあがっている項目を読むと、それはそうだなと正しい感じがするけれど、では一体どうやったらそれは達成したと言えるのかというのがやはりわからない。いつどうやったら達成されるのだろうか。非常に難しいとは思いますが、例えば参加者数でいくとどれくらいであるとか、世代の構成でいくとどういったものを理想とするのか、人材バンクでの講師のなり手が増えてきたというのはなんとなくいい感じとして組み立てられたと思うけれど、ではそれがどのくらいになっていけば良しなのか、目標の姿というか、もう少し具体的な目標に落とし込まれると、現状と目標との照らし合わせがうまくできていくのではないかと、あるいはその過程で必要なステップが見えてくるのではないかとこの気がする。
- 今アウトカムの指標が足りないというのは、その人が健康かどうかチェックをする時に、健康診断のデータが足りない。だから健康かどうか見えない。私は健康でしょうかと持ってきたデータがばらばらで、これだとあなたが健康かどうか自信をもって委員として評価できない。私は健康になりたいんですという姿も、この人が何を健康としてイメージしているか見えない。オリンピックに出たいのか、長生きしたいのか、持病と付き合いながらうまくやっていきたいのかという、その人の健康の姿の具体的な姿が見えないので、健康かどうかわからないし、なりたい姿にその人がどうやったらなったと言えるのかもわからない。その2つが曖昧なのが、議論が難しい理由ではないかと思う。
- 有賀委員 アンケートの最後の2つ目あたりの、受講後なにか活動をお考えですかとか、

どのような活動をお考えですかという質問の答えとして、世代間交流とは、具体的にどういうことか。社会活動の中にも内訳があるはず。もう少し具体的にしたらよいのではないか。

金澤委員 アンケートの全体としての満足度を教えてくださいということで、満足かや満足かということ聞かれていて、それをもとに7割の方が満足していますという受け取り方はわかるが、その満足の中身がこれを見るだけだと全く見えてこない。受講者は講座で何をもち帰ったのかなど、もう少し細かい項目を洗い出していきたいと思う。そこから受講料の金額や時間帯、講義回数が多いか少ないかなどいろんなデータがあるが、これは外側の入れ物の話であって、実は中身については何も言及されていないので、内容がどれだけ充実していて、受講者がどれだけ魅力を感じていたかということは、やはりここからだと見えて来なくて、質的なところをもう一度検討なさったらと思う。

大木副課長 今お配りしたのはアンケートの集計表であり、いくつか講座があるうちの、アンケートのコアな部分を抜き出したものである。それぞれの講座でアンケートがある。今お渡ししたのはそれを抜き出して全体を総括した資料で、実際にはもう少し細かくは取ってある。ただそれがそれぞれの講座によって規格が違っており、これを全部提出するわけにできなかったのもので、全体を通した共通の部分の集計という形のものを出した。

左京委員 中身についてであるが、具体的にどのようなことを聞いているのか。テーマが違ってても、中身について聞く観点というか、質的なことを聞く時に何か共通点があるのか。

与那嶺委員 この前いただいた資料の中にある。

副委員長 講座ごとに質問内容は違う、ということでもよろしいか。いつもアンケートは出しているわけではないと。

大木副課長 ほかの講座についても、それぞれアンケートは取っているが、統一はされていない。

副委員長 まだ議論が続くようであるが、皆さんもご予定があるでしょうから、左京委員から何か欲しい資料があれば行政に資料を用意するようお願いしていきたい。

左京委員 現状把握に必要なアウトカムに関する資料があれば、それをいただければと思う。直近のものでも昨年度1年間のものでも、個別の講座に関するものや

全体に関するデータ、両方あると助かる。

宮地委員 キャンパスおだわら情報誌を見ていたけれど、子どもが参加できるものについてはマークがあるが、子どもというのは具体的に何歳なのか。例えば10月号14ページだと、子どもマークがついていて小学生3年生以下はだめと。地形地質観察会は小学校4年生からとなっているのに、子どもマークがついていない。子どもが、自分が参加できるものがどれなのかということがわかりにくいと感じた。私たちも委員になってはじめてわかることもあるので、子どもを参加させたいとしたら、子ども委員などを小中学生に募集して、委員会にするのも不都合ないかと思うし、子ども委員だけの集まりを募ればやっていただいて、例えばキャンパスおだわらの運営について、実際に企画、参加させていくのも方法かなと思う。

もう1点は、企業の参加が少ないと言っていたと思うが、来るものだけをどんどん受け入れるのではなくて、行政側として小田原のいくつかの企業に積極的にやってくれないかということをもう少し言ってよいのではないかと。企業側としても社会貢献ということにもなるので、いいかなと思う。

副委員長 よろしくご検討いただきたい。

3. その他

- ・ 次回の運営委員会は12月19日（木）午後2時から開催。後日案内を発送。

以上